

介護実習におけるリアリティショック

— その様相と肯定的側面について —

伊藤 健次

要 約

本研究の目的は、学生たちが12日間にわたる実習経験の中で受けたリアリティショックの様相を明らかにすることである。学生たちが実習でうけた「ショック」について語ったグループインタビューを分析した結果、施設職員に関連する事柄について多くの発言がおこなわれ、第一段階実習においては主に職員からプラスマイナス両面の様々な「ショック」を受けていることが示唆された。また、自分が受けたリアリティショックについて学生自身が考察することは介護を学ぶ動機付けを高める可能性が見いだされた。

キーワード：リアリティショック 4年制大学 介護福祉士養成教育 特別養護老人ホーム 介護実習

1. 緒言

介護保険制度導入後の介護福祉士の労働環境は景気の変動や制度改正の影響を大きく受け、低賃金¹⁾で離職率が高い^{2,3)}という好条件とはいえない現状に加え、今後は非常勤雇用比率の増加や賃金の抑制傾向などさらに厳しい状況が予測される。また、大学全入時代が目前に迫り、専門学校や短大のみならず4年制大学においても受験生を集めるのに多くの努力を重ねている状況下で介護福祉士養成施設は入学希望者自体の減少とそれに伴う入学者の相対的な能力低下と、即戦力指向のつよい採用側の要望との狭間で教育を行わねばならない。加えて、介護従事者の質の向上を目的とした、ヘルパー制度と2分化していた介護資格の一本化や将来の担い手不足を見越した海外からの介護労働者受け入れも動きだしている。賃金上昇が見込めない中で質の向上を常に要求される、という労働環境が認識でき、かつ介護分野以外での就業も十分可能な4年制大学の学生たちはただ単に資格が取れるから、という理由だけでは介護を学ぶモチベーションを保つことはできない。介護という仕事のやりがいを、学び自体を通じて実感

できる必要がある。実習はそのまたとない機会となりえるのではないだろうか。

リアリティショックとは1974年にKramerが発表した⁴⁾概念であり、我が国においては1980年代以降、主に看護分野での取り組みに活用されてきた。介護福祉士や介護福祉士取得を目指す学生に関するリアリティショックの研究はこれまで殆どなされておらず、わずかに上田智子「介護学生のリアリティーショックの様相」⁵⁾等があるのみである。上田は、介護実習によるリアリティショックは学生に「自信喪失」や「適性疑問」を持たせる⁶⁾、としている。看護分野ではバーンアウト研究においてリアリティショックの概念を用いて様々な研究がなされ新人教育におけるプリセプター制度の導入といった形で応用されているが、多くはリアリティショックをネガティブにとらえ、「克服する」「乗り越える」といった表現^{7,8)}で用いられる事が多い。そこで、本研究では2006年9月、学生たちにとっても本学にとっても初の実習となる「介護実習Ⅰ」において、初めて介護現場(特別養護老人ホーム、以下特養と略記)の実情に触れた学生たちが12日間にわたる実習経験の

(所 属)

1) 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

中で何を感じ、考えたのか、その足跡を残すとともに、実習指導におけるふり返り、グループインタビュー、実習報告書作成の過程を通じて吐露された、学生が直面したリアリティショックとはどんな事柄なのか、リアリティショックがもつ教育効果にも注目して考察を行いたい。

2. 用語の定義

リアリティショック：特養での介護を体験した際にうけた、実習前に思い描いていたこととのズレ、違和感、ショックに感じたこと、自分の理想との相違、などにより生じる様々な学生の反応

学生：本学で介護福祉士履修課程に所属する2年生

3. 調査

3. 1 介護実習I終了後のグループインタビュー

3. 1. 1 実施概要

目的：学生が実習で感じたり直面したりした様々な「現実」＝（実習前に思い描いていたこととのギャップ、違和感、ショックに感じたこと、自分の理想とのズレなど）を表出し、それを記録化することを目的とした。

対象：「介護実習I」を実施した山梨県立大学介護福祉課程に在籍する2年生（20名）のうち、グループインタビューへの参加を表明した13名（男性2名 女性11名）

調査方法：学生相互の自由な表出を阻害しないよう、同席教員はテーマの提示（図表1）のみを行い、原則として会話には参加しなかった。インタビュー時間は各グループ90分であった。

倫理上の配慮：グループインタビューへの参加依頼文章を介護福祉課程在籍者全員に配布し、グループインタビューの目的、意図、プライバシーへの配慮、インタビュー内容は録音するが個人名は特定されないこと、不参加でも不利益は一切ないこと等を明示したうえで参加承諾書（参加を希望しない場合は非承諾書）の提出を受けた。データは番号表記で取り扱い、会話中の個人が特定できる部分に関し

ては〇〇さん、などの表記に改めた。

分析方法：インタビュー内容の録音から逐語録を作成し、質問項目毎の分析をよび、インタビュー全体から抽出したキーワードをKJ法に基づいて分析を行った。

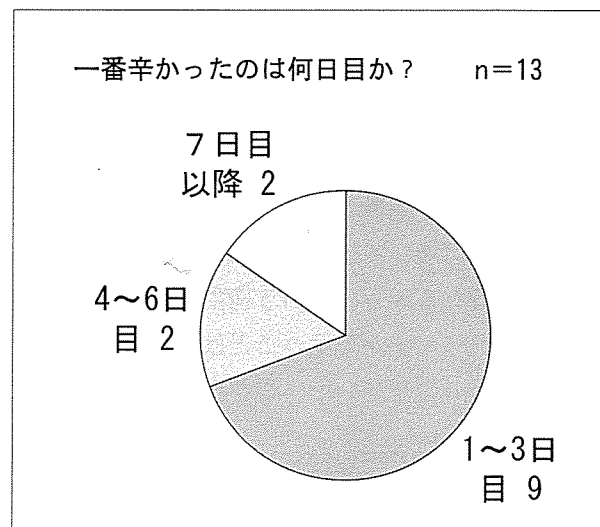
図表1 グループインタビューにおける質問項目

- 1) 実習をふり返ってもっとも辛かったのは何日目か
- 2) 実習中に会った最もショッキングな出来事について
- 3) 実習中に感じた違和感について
- 4) 実習を短い言葉で表現すると何になるか
- 5) 実習で一番辛かったことについて
- 6) 実習前に想像していたよりもよかったこと

3. 1. 2 グループインタビュー結果

1) 実習において最も辛かったのは何日目か

13人中9人が初日から3日目までが辛かったと回答した。実習後半の方が身体的精神的疲労は蓄積しているはずであるが、多くの学生たちが「辛かった」と認識しているのはむしろ実習の初期であることがわかった。これは実習先施設への順応が学生たちにとって大きな課題であり、後にもふれるが自らの「実習生としての立ち位置」を見極めるのにかなりのエネルギーを費やしている事を意味する。



2) 実習中に会った最もショッキングな出来事について

以下の4つのカテゴリが見いだされた。職員の言動とケアの内容に関する事柄の表出が多く、実習生が職員を通して施設の実情を感じ取っていることが示唆された。「ケアのやりかたに関して」：学んだこととの違いや自分の生活感覚とのズレにたいしての驚きなどが表出された。「職員の言動に関して」：職員の入所者への言葉かけや関わり方に対する疑問、怒り、驚きなどが表出された。「利用者に関して」：入所者の身体などの外見的な点や、認知症の方の言動などに関する驚きやとまどいが表出された。「死去」：実習中に入所者の死去に遭遇した学生からはふいに直面した死に対しての驚きや、施設によっては死去後に関わりをもたせて貰えないことに対するとまどいも表出された。

3) 実習中に感じた違和感について

以下の3つのカテゴリが見いだされた。施設内での関係性（職員間、利用者間、職員利用者間、実習生職員間、実習生利用者間など）と自分の生活感覚とのズレに関する事柄に対しては実習前に漠然とイメージしていた事との差異を様々な場面で感じていることが分かった。「施設内の人間関係」：自分が入所者の生活に踏み込んでいくことや特養という空間内での関係性に関するとまどいが表出された。「自分の感覚とのズレ」：自分自身の普段の生活感覚と特養での生活の実情の相違や、自分がもっていた「お年寄り」イメージとのズレからくる違和感が表出された。「ケアのやり方に関して」：ある意味「手荒い」部分や「効率重視」な部分もある現場の介護方法に対して、現場の忙しさを理解しつつも「これでいいのか？」という感覚を含んだ違和感が表出された。相手の力を引き出し、自立を支援する介護方法や入所者の尊厳を守るという理念と必ずしも合致しない現状（拘束など）についても違和感が表出された。

4) 実習を短い言葉で表現すると何になるか

以下の5つのカテゴリが見いだされた。実習経験が自らと向き合う契機となった様子がうか

がえ、不安や緊張と共に自身の成長を実感する表現も見られた。「自分と向き合うこと」：初めの経験に戸惑いつつも一つ一つを取り込み、自分の言葉にして考えていた様子が表出された。「コミュニケーション」：介護を提供する機会よりも人との関わりの時間が長いなかで、ゼロから関係を作り会話するということの難しさや重要さの気づきを表出された。「介護職員に関すること」：職員の介護スピードの速さや、日常として介護をすることによる「慣れ」に関する表出がなされた。「学び」：様々な気づきを得て自分自身の変化や成長を自覚する言葉が表出された。「感謝」：仕事をする存在としては「未熟」な自分を認識し、そんな自分に実習の機会を与えてくれる利用者や実習先に対する感謝の気持ちが表出された。

5) 実習で一番辛かったことについて

以下の2つのカテゴリが見いだされた。技術的な未熟さよりも圧倒的に多かったのが実習生としての立ち位置をどう定めればいいのか、という表出であった。実習生は何をするべき存在なのか、自分自身では決めかね、入所者や職員とどのような距離感で接していいのか、という葛藤が強く表現された。一方で、「辛くはなかった」「楽しかった」という発言も見られた。「実習生としての立ち位置」：今回のグループインタビューの中でもっとも多く発言がなされた。実習とは職員から指導を受けながら技術を学ぶこと、というイメージが強くあったようであり、現実には職員から離れて一人で入所者と対峙する時間が長く、何をしたいのか、どこまで自分が判断していいのか分からない点が「最も辛い」こととして表出された。実習中の自分のポジションが定まるまでの葛藤は小さくはなく、実習前半は慣れるので精一杯で主体性を発揮できず、職員の顔色を覗いながら時間を過ごし、入所者とじっくり向き合う余裕がない様子が表出された。「実践力不足」：直接介護の技術よりもコミュニケーション能力に関する事柄が多く表出された。相手の特性の理解やそれに応じたコミュニケーション、という点において「何も

出来ない自分」を強く認識している様子が表出された。

6) 実習前に想像していたよりも良かったこと

以下の5つのカテゴリが見いだされた。実習前は特養や職員に対してかなりのマイナスイメージを持っていて、実習先の空気を「アウェイ」と表現し、歓迎されない雰囲気を感じていた学生もいた。しかし現実に特養を経験することで「暗い」「寂しい」「寝たきりのお年寄りばかり」といったイメージが好転した様子である。自分自身にたいしても自己評価が高まり、自分の頑張りを評価する表現が見られた。実習におけるリアリティショック経験はマイナスだけでなく、プラスの方向に作用するショックも学生たちに与えたことが様々な表現で表出された。「施設・職員の雰囲気」：3K職場で辛さに耐えて業務を遂行する、という職員イメージが明るさや前向きに頑張る姿にもふれることで介護を職業とする事への肯定的意識へとシフトしていく様子が表出された。「特養の日常」：「重度利用者ばかり」とか「ひなたぼっこをしている感じ」といった偏ったイメージが、様々な活動や交流があり、笑顔有り笑いありの一面にもふれることで修正されていた。「実習自体」：実習前の漠然とした不安や行きたくないという思いから、想像ほどのダメージを受けずに実習を終えられたという思いが表出された。「自分自身」：何もできない自分という評価から、とにかくやり遂げた、頑張れた、予想以上に楽しかったという自己評価が表出された。「利用者」：抽象的にとらえていた老人像が幅の広い具体性を持ったものに広がった様子が表出された。

4. 考察

この実習において学生たちがうけたリアリティショックはそれぞれの個人的な経験や感情によって様々なものがあり、個々人のもつ興味や悩みに深く根ざしているように思われる。その多様さの一方で殆どの学生に共通する傾向も見受けられる。それは施設内における人間関係、特に職員がからむ関係性である。特養の現状からすれば職員にべっ

たりついて実習を行うわけではなく、利用者と直接対峙する時間のほうがむしろ長いにも関わらず、リアリティショックとして表出する中身には利用者よりもむしろ職員が関連する内容の方が多い。これは学生たちは職員の言動から受ける影響が大きく、職員を通じて状況を理解し、考え、その結果多くの職員経由のリアリティショックをうけているからだと考えられる。職員の行うケアは時として実習生が抱く理想像とのギャップを生み出す。ただ、そういった初めてふれる現場での経験にショックを受けつつも、それらを消化し、実習期間をクリアすることによって自己評価が向上したり、実習前よりも特別養護老人ホームという場や、介護という職に対するマイナスイメージがプラスに転じたりする効果も同時に持つことが学生の言葉から読みとれる。そういった意味において、介護実習におけるリアリティショックは必ずしもモチベーションの低下に直結するわけではなく、就業し、ヒューマンサービスの専門職種として働く際に受けるリアリティショックとは様相が異なると考えられる。

とすれば、従来の回避したり軽減したりすることだけを目的とした方向でなく、より効果的な学習を行うための「手段」として活用し、活かしていくことが重要であろう。では、積極活用のためにはなにをなすべきであろうか？。その一つとして、個々がうけたリアリティショックに焦点をあて、自分自身の考え方の傾向や価値観と向き合う学習を積み上げることが考えられる。クールヘッドとウォームハートといわれるように福祉従業者は受容的共感的で温かい接遇を求められる一方で、冷静に客観的に、時には事務的効率的に業務を遂行する必要も出てくる。しかし、福祉教育においては前者の部分だけが特に強調され「受容」「共感」はある種異論を挟む余地が無いかのように教えられ、後者の重要性はあまりふれられないように思う。実習生として現場に赴き現場の日常的な業務が教えられた内容や自分自身がそれまでの経験や学びの中で積み上げてきたイメージと異なる場合、その「ズレ」がリアリティショックとして認識されることになる。学生たちの多く

はリアリティショックを受けた際の感情の動きについてはあまり自覚しておらず、実際にグループインタビューのなかでも揺り動かされた自分の感情がどこから生まれているのかには無自覚で、ショックを受けた現象面のみを認識しているケースは多いように見受けられた。そのことから実習での体験を単なる体験として終わらせず、実習後の学びや今後の実習に繋げていくためには、実習時の自己感情の動きを言語化し整理することが非常に重要であり、実習後の振り返りや実習報告書を書く際に自分自身の感情と向き合う仕掛けを作り、意図的にリアリティショックを活用していく取り組みが必要と考えられる。また、自分が受けたリアリティショックを振り返り掘り下げるという行為そのものが学生たちの気づきや学びにとって大きな意味をもち、実習後の次なる学びへのモチベーションの向上につながるのではないかと考える。4年制大学における介護教育は職業教育的な側面ももちろん含むが、就業後の職業教育と同一に扱うことはできない。最近の学生は必ずしも明確な目的意識を持って大学に入学していないのではないかと⁹⁾という指摘もあり、本学においても他分野での就職も視野に入れてインターンシップへの参加や公務員試験受験を考えている学生が存在する。4年間という時間をもち、多様な職業選択が可能な現在の状況下においては資格取得の課程に在籍していることは資格取得後にその資格を生かした職業に就くことを直接意味するわけではない。この辺りは2年間という短いスパンでカリキュラムをこなさなくてはならない短大や専門学校における介護福祉士養成と大きく異なるポイントである。大学での教育内容は介護分野以外にも多岐にわたり、学生にとって介護実習は数ある学びのうちの一つにすぎない、と考えるべきである。だからこそ実習に対するレディネスを整えて実習に臨み、介護という仕事のやりがいを、実習を通じて実感できることは4年制大学での介護福祉士養成には特に重要である。

実習において何のリアリティショックも感じることがなければ、実習から得ることのできる学びは非常に少なくなると思われる。今回のインタビュー

結果からは、教員や現場職員が見て欲しいと考えている内容としっかり向き合い、きちんと葛藤している様子が見て取れる。これらのショックに直面した場面を大切に活用することこそが実習のもつ教育効果を最大限に発揮させることになるであろう。介護実習生にとってリアリティショックはプラスのストレス、筋力トレーニングにおける負荷の効果も併せもつといえる。少なすぎる負荷ではトレーニング効果がでず、過度の負荷では効果がでないばかりか身体を痛める、ということである。無論、実習中の学生の落ち込みには十分な配慮が必要ではある。12日間という長丁場のなかで「明日も実習に行く」というエネルギーを補充することは必要不可欠である。だがしかし、現場で遭遇するリアリティショックを最初から回避したり、軽減させたりする方向性はその教育効果を低減させてしまうおそれもある。一方で専門職種としての基礎教育を終え、資格を取得して就業した、つまりは第一段階の実習生よりも広く深い知識経験をもつ新人職員が感じるリアリティショックについても十分な対策が必要である。介護実習の段階で、学生として受けるリアリティショックと十分に向き合っておくことは一種のワクチンとして就業後にも効果が持続することが期待できる。このことから実習時のリアリティショックの活用は意味があると考えられる。

グループインタビューの項目でいえば、感じた違和感やショッキングだったことなどは非常に教育効果の高い部分であるといえる。しかし、「一番辛かったこと」で語られている内容においては実習に対する自己イメージと現実の実習にズレが実習生にストレスを生じさせていると推測される。この実習へのモチベーションを下げるリアリティショックに対処する方法は二つ考えられる。一つは学生に対して実習の目的を繰り返し説明し、単に介護技術を試すことや業務をこなして職場の戦力となることが目的ではないこと、利用者と同じく向き合い、コミュニケーションをとることの重要性を実習前に理解してもらうことである。これは、学生から介護実習生への変身を意図的に促進するということである。もう一つは実習先施設

と綿密に打ち合わせを行い、実習目的に沿った内容で実習時間を組み立ててもらうことである。どちらも当たり前であるが徹底されていない事柄である。現場の都合からすれば、実習生にたいしてマンツーマンの指導は望みにくいのが現実であるが、単なる「放置」や目的の不明確な単純作業（利用者との接点がない状態での）が長時間続くことは好ましくない。そういった状況でも主体的に動ける学生を理想としてしまう気持ちが教員にも受け入れ職員にもあるが、実習前に職員が行って

るレベルの判断や技術を身につけることは非現実的であるし、実習前にそのレベルに到達できるのであればそもそも実習に行く意味が無くなってしまふ。実習前指導においてはむしろ職場文化へのとけ込み方、職員との関係作り、利用者とのファーストコンタクト、認知症の利用とのコミュニケーションの結び方、認知症のかたのコミュニケーション特性などに重点をおくことがより効果的であると考えられる。具体的にいえば学生が困るシーン、例えば「コミュニケーションをとっていい」という

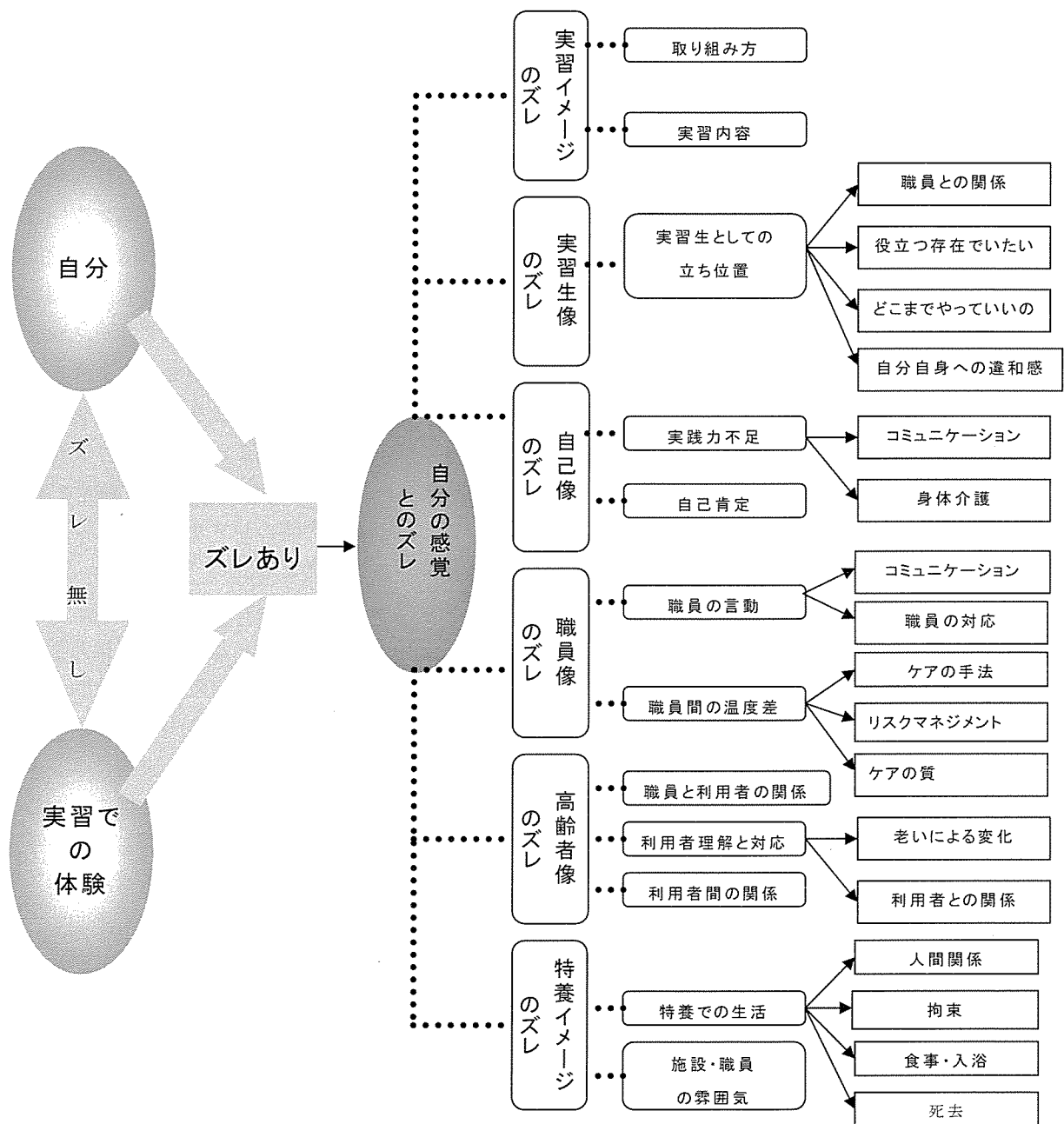


図2 リアリティショックの様相

「指示」をうける場面であるとか「何をしたいかわからない」などの場面に、実習生として自らどんな働きかけを職員・利用者に対しておこなうのか、のシミュレーションを行い、学生の主体的な働きかけを活性化させることが考えられる。

知識も技術もまだ血肉化しておらず「一通りは知っているがまだ使いこなせない」段階で利用者と対峙し、振り回され、困惑し、揺らぎ、出来ない自分と向き合うことは自分の「現在位置」とこれから向かう「目的地」をはっきりさせる効果があるだろう。大切なのはショックを受けないこと、ではなくそのショックをどう噛みくだき、活用するか、である。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は一大学の少数の学生を対象とした一回のみの限定的な聞き取りであり一般化するには不十分である。今後は継続的に聞き取りを行うこと、調査対象を高校、短大、専門学校等の大学以外の教育背景をもつ実習生にも広げること、実習前後の学生の意識変化を把握すること等の調査を加え、効果的な介護実習指導方法の構築につなげて行かねばならない。また、就業後の介護職が遭遇するリアリティショックとの比較検討も行う必要がある。

6. 謝辞

研究趣旨を理解し、時間を割いて協力してくれた学生諸君に心から感謝申し上げます。なお、介護実習におけるリアリティショックという着想は平成17年度介護教員講習会「研究方法」第20グループにおけるグループワークから得たもので

あり、メンバーの皆様にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省：「平成17年賃金構造基本統計調査」平成18年3月
- 2) 介護労働安定センター：平成18年「事業所における介護労働実態調査」2006.6
- 3) 厚生労働省：平成17年雇用動向調査 平成18年8月
- 4) Kramer M. : Reality shock why nurses leave nursing, C. V. Mosby, St Louis, 1974
- 5) 上田智子：介護学生のリアリティショックの様相 岡崎短期大学研究紀要38号 P35～43 2005
- 6) 上田智子：前掲書 P43
- 7) 水田真由美ほか：リアリティショック緩和のための卒業前技術トレーニングとストレスマネジメント教育の実施と評価 日本看護学教育学会誌16(1) P43～52 2006
- 8) 伊藤徳子：新人看護師がリアリティショックを克服していく課程とその要因 看護教育研究集録30号 P160～167 2004
- 9) 文部科学省：中央教育審議会大学分科会大学教育分委会第一回議事録 平成18年2月

参考文献

- 1) 水田真由美 新卒看護師の職場適応に関する研究：リアリティショックと回復に影響する要因 看護管理27(1) P91～99 2004
- 2) 藤原裕美子ほか 専門職のキャリア発達に影響を与えるリアリティショックの実態-看護学生から看護師への移行プロセスにおけるプロフェッションフッドの変容に焦点を当てて- 経営行動科学学会年次大会：発表論文集(7) P40～47 2004
- 3) 宮脇美保子 大卒看護師1年目の体験 日本看護学教育学会誌15(1) P15～24 2005
- 4) 田尾雅夫・久保真人 バーンアウトの理論と実際 心理学的アプローチ 誠信書房 1996

The Reality Shock in Care Training

— About the Aspect and the Affirmative Side —

ITO Kenji

Abstract

A purpose of this study is to clarify an aspect of the reality shock that students took in training experience for 12 days.

As a result of analysis of the group interviews which the students referred to the shock that they had took during training, there were many remarks concerning the institution staff, and it was noticed that the students took various "shocks" on both good or bad side by the staff in the first grade training.

It was also found that there was a possibility to raise students' incentives for learning care if they considered the their reality shock in the training.

Key words : reality shock, care worker training